

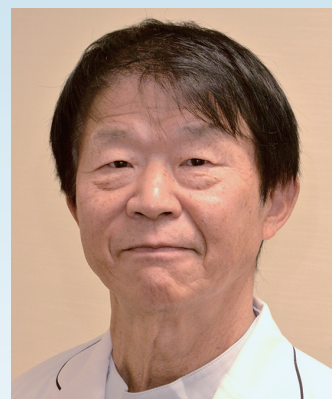


羅針盤

大原 國章

Kuniaki Ohara

赤坂虎の門クリニック皮膚科



図譜こそ羅針盤

部位別アトラスシリーズが、ついに今回で最終となります。思いおこせば、私(大原)が新人のころは皮膚病図譜・アトラスが数多くあったほか、製薬会社の販促品としても入手でき、それらのカラー写真を眺め、解説文を読むのが皮膚科学習の初歩でした。

皮膚科診療の基本の基はなんといっても視診であることは古今東西の理(ことわり)といってよいでしょう。その視診の技を究めるには数多くの実症例を経験するのが一番ですが、それは容易なことではありません。その代用となるのが、図譜による“疑似”症例を誌上で経験することです。ともすれば、総合わせ診断と揶揄されるかもしれませんが、「あ、見たことある」と理屈抜きで診断できるのは醍醐味です。「あの本の92ページの右側の写真と一緒に、あれあれ」これです。

典型的な病像が頭の中に叩き込まれた後は、非典型的の病像、好発部位以外の発症例が問題となります。「ほほー、こうきたか」とつぶやくにはどうすればよいか。せっせと学会や講習会・勉強会に足を運んで、症例報告をじっと見るのが役立ちます。自宅でコーヒーやビールなどを飲みながらパソコン画面を見るよりは、実際の会場でスライドを見るほうが頭にしみこみます。会場の照明が暗くなり、演壇のスクリーンに画像が映し出されるとともに、集中力が高まってくるものです。「おっと、これもありね」となります。自分が時間をかけて文献を調べなくても、演者が要領よくまとめてくれるのですから、こんなに楽なことはありません。この作業を続けていれば、

いつの間にかお腹一杯になり、「ごちそうさまでした」と孤独につぶやくようになります。

ということで、学習の第一歩として本誌連載のアトラスシリーズがお役に立ってきたと信じたいのですが、いかなせんすでに絶版、入手不能となってしまったものがあります。

そこで、過去のアトラスシリーズをまとめて単行本化する作業が進んでいますので、ぜひお手元に置いて診療のお役に立てていただきたいというのが、編集者一同の願いです。もちろん出版社としての営業的なお願いも入っていることは言を俟ちません。紙媒体からデジタル情報への移行は、言われて久しく、時代の流れ・趨勢かもしれません。紙の書籍や雑誌の良さはどこにあるのか、これからも追及していかなければなりません。

最後に私事ですが、私(大原)は今月号を以って編集の任を降ります。これで本誌の創刊時のメンバーはすべて(大概も含め)引退し、次世代に後を託すことになります。「新しい酒を古い革袋に入れない」のたとえどおり、新機軸での展開をご期待ください。

私個人としては、この羅針盤や過去にも(他誌に)書いてきた編集後記など、物書きから解放されるのは肩の荷が降りる思いです。

“打ち出の小槌”、“『ドラえもん』のポケット”ならぬ私の頭では、気の利いた話が毎回のようには無尽蔵に湧いてはきませんので。